

Steinbeck 研究

森 政 勝

ま え が き

1936年12月から1958年までの間に、John Steinbeck とその作品に関する批評は種々な形で発表されたが、筆者の知り得たものだけでも134篇ほどある。その中で1958年に出た Peter Lisca の *The Wide World of John Steinbeck* は、ほとんど全部の作品を網羅（羅）している点で最も包括的な作品研究であり、非常に権威のあるものである。Steinbeck 研究の第一人者と目される Lisca の博士論文 *John Steinbeck: An Analysis and Interpretation of Its Development* は完璧に近い Steinbeck の再評価であると言われるが、不幸にして入手できない。わが国においても Steinbeck の断片的研究は少くないが、作家と作品と bibliography などを含めた研究書はまだないようである。多くの人びとのやつた研究や批評によって、この作家とその作品の公正妥当な評価ができればと願うばかりである。

I 作 家 論

(1) animality

What is constant in Mr. Steinbeck is his preoccupation with biology.¹ という E. Wilson の言葉を待つまでもなく、Steinbeck が生物学に非常な関心と熱意を持っていたことは衆知の事実であり、それが人生、社会、宗教などに対する彼の見解に反映し、したがって彼のいわゆる “is”-thinking, group-man theory, または、数篇の小説にうかがわれる神秘主義などはこの生物学的な立場からのみ説明しうるものである。

Steinbeck の思想に深い感化影響を与えた海洋生物学者 Edward F. Ricketts との十有余年の交友の間に養われた bite deeply into living のやむにやまれぬ必要さが、人間をも含めた生物の研究に没頭させたものと思われる。かつ、人間生活の動物性に同情の目を向けるようになったのは、彼をはぐくみ、彼が限りなく愛した Salinas Valley の生活のためであろう。

あらゆる生命は同一である、とする彼の強い信念は終始一貫して変っていない。生命は生物学的説明のかなたにあつて、ひどく神秘であり不可思議であり驚異に満ちている。海の無セキツイ（脊椎）動物の採集調査の日誌である *Sea of Cortez*, 1941をひもとけば無数にその例を知ることができる。また、Camille Oaks という女性（*The Wayward Bus* 中の人物）の肉体からあやしくも出る発散物もこうした実例の一つである。生物学に通ずる者の持つ特有な物の見方が作中人物の態度や行動を規定することは言うまでもないが、そのように規定される態度や行動にもやはり一つの価値と美徳があるものとされる。

Steinbeck の作品が自然主義的な立場からの独特な生物学的風趣を持っているのは当然であり、その風趣は生物学的な allusions となり、metaphors となり、また、analogies となつて表現されている。*The Grapes of Wrath*, 1939の Joad 一家のものがトラックの周囲に集まるさまを、生きた細胞が核を中心として集合しているさまと観ずるなど。 *Cannery*

Row, 1945 の Doc は通りすがりのいぬに帽子を取つてあいさつするが、これは愛情の誇示ではなく、神聖な生あるものに向つて頭を下げただけである、となすなど。Steinbeck の化身とも見られる Casy (*The Grapes of Wrath* 中に出てくる元説教者) は All that lives is holy. と言っている。

Steinbeck には tendency...to present life in animal terms (E. Wilson) すなわち animalizing tendency があり、彼の物語はこれによつて特色づけられる。人間の動物性に対する興味と関心のため彼の文体は極端に平易化され、人間的人物創造を不十分にし、時に失敗させている。また彼は、現代社会の闘争を a tragicomedy of animal instinct と見ている、と Alfred Kazin は説明しているが、この闘争に接したいという好奇心と、それから遠ざからなければならぬという気持とが Steinbeck の胸中で相争う。この動物本能が最善のものとして見事に表現されているのは *In Dubious Battle*, 1936 と *The Wayward Bus*, 1947 であり、この両作は動物としての人間の苦悩や人間の過誤を理解させるに役立つ。しかし、これらの作では、人間という動物が動くことのできる限界と新しい状態への順応能力という生物学的属性——彼はこれを重要視している——を学び取ることはできても、人間生活の深度についてはその暗示すら知ることはできない。

D. H. Lawrence や R. Kipling のように、動物を人間にまでロマンティックに高めることを Steinbeck に求めることは無理ではあるが、人間を動物に同化させる手腕には効果的なものがある。それが効果的であればあるほど、人間性の動物化は個人的人間創造の失敗を確定的にする一つの原因となる。それ故に(?)彼は抒情的な幻想的散文を用いて人間を祝福することを忘れなかつた。こうすることによつて生活の現実的錯雑や煩わしさは、文学的モードの快適さの中に姿を消してしまえるからである。彼の数ある作品中、人間の動物化のなされない、つまり人間を人間として見ている作品は *The Grapes of Wrath* だけであろう。

生物学的個人性を社会的有機体の中に没し去ることは聖霊に対する罪悪である、と見なす彼は、生物学的個人性の遺伝に興味をいだいていたし、一方また人間の受けつぐ、mythopoeic な遺産にも異常な感興をそそられていた。これは *To a God Unknown*, 1933, *Of Mice and Men*, 1937, *The Grapes of Wrath*, *The Moon Is Down*, 1942, *The Pearl*, 1947, *Burninig Bright*, 1950, *East of Eden*, 1952 などの作にも十分にうかがわれる。このような点から見て Harry Slochower は Steinbeck が Heinrich Mann, Anna Seghers, Mihail A. Sholohov, André Malraux, Thomas Mann などと同じような傾向を持つものであると断じ、このような作家について Their work reclaims our faith in the rationality of man's natural history. It is a kind of moral-esthetic counterpoint to the physical disorder of our day. Their art is the contemporary secular equivalent of man's divinity... と述べ、かつ「道徳的審美的な対位物」であるとして彼らの作品を高く評価し、「人間の有する神性の当代的地上的な等価物」であるとして彼らの芸術を高く位置づけている。

Steinbeck は動物の習性には関心を示したが、動物の与える印象は余り問題にしていない。彼が取扱っているのは、いつも下等動物と、ほとんど動物の水準に近い人間だけである。人間と動物との関係は David Garnett や D. H. Lawrence の作にも見られるが、それは動物愛護を主題にしたものに過ぎない。Steinbeck の場合は動物と人間との、いわば親戚関係といったものである。Little Frog と呼ばれ Coyote (アメリカのおおかみ) とも呼ばれる白痴の少年 (*The Pastures of Heaven*, 1932 中の人物) は、けだものや小鳥の絵を休みなく黒

板に書き続け、Thomas Wayne (*To a God Unknown*中の人物) は too much an animal himself to be sentimental⁴ であり、the Pirate と呼ばれる男 (*Tortilla Flat*, 1935中の人物) はいぬ小屋にいぬと同居し、ある男 (*In Dubious Battle* 中の人物) はいぬと同じような個性を持ち、*Saint Katy the Virgin*, 1936 (この中では豚が改シェン(倭)して聖人となる)では *Fioretti di San Francesco* (聖フスンススコの小さい花) の場合とは異り、豚を道具にして人間の宗教をやユ(揶揄)するのである。また Lennie (*Of Mice and Men* 中の人物) は好きでたまらない動物を持ち回り、その動物を愛情の果てに虐殺する。Joad 一家の旅は一匹のかめが道を横切る光景で象徴が開始され、*The Chrysanthemums*, *The White Quail*, *The Snake* (この三作はいずれも *The Long Valley*, 1933中の短篇小説) に出てくる女は自らを菊や白うずらや、へびと全く同一のものであると感ずるのである。

小動物の生態や行状に対する Steinbeck の好奇心は余りにも強烈であるため、人間を動物の面でながめるばかりでなく、動物性だけを持つた人間を読者に信じこませようとする。その結果彼の小説の知的内容は実質的には弱まり縮小する。人間の確定的な定義を彼に求めることは当を得ないであろう。ひと度動物性の面で人間を定義しようとし、情緒的な面を狭くすると、そこには必ず皮相的で、一面便利な観念化をやらずにはおられない悲劇が生ずる。知的操作の混乱のしかたこそが、彼の小説を批判する決定的な役割を果たすことになるであろう。「しかし Steinbeck の中には一種のパラダイスの清浄があり、アダム以前のムク(無垢)な状態があるのではないか。そこには人間に関係のない領域があるからである。人間やつかねずみを愛ブ(撫)のためにだけ絞め殺す低能の大男レニーにしても動物性の中でだけとらえられており、個人性を持つ人間としては考えられてはいない。」このような意味のことを Claude-Edmonde Magny⁶ は説いているが、更に彼女はその著 *Steinbeck, or the Limits of the Impersonal Novel* の中で But one cannot help wondering whether there are very great possibilities open to a “novelist of animality”, however perfect his art may be and however deep the bond of sympathy between his subject and himself. と言っている。Steinbeck のその後の作を見、今後を推測してみても Magny の予言は不幸にも的中するのではないかとあやぶまれる。

あらゆる生命は同一であるとする Steinbeck の主張は一種の宗教的態度である。彼の宗教について一ベツ(瞥)してみたい。Steinbeck のイディオロギーの一つの重要な要素である生命尊重(生あるものはすべて神聖であると彼は説く)の原則は東洋、特に仏教で説くところと全く同じである。生命の尊重、すなわち、自然の神聖さを明らかにしようとした彼、自然愛の中に神秘論者特有の仮定的態度を設定し、人間の対宇宙関係を熟考し、それを理解しようとした彼、万象の持つ一つの意味を感じ取るために、官覚経験に基づく科学的知識を超越しようとした彼、こうした彼は orthodox な意味においてではなからうと、宗教的であったと言いうる。W. O. Ross によれば、Steinbeck is, I think, the first significant novelist to begin to build a mystical religion upon a naturalistic base.⁷ この新しい態度は極端に原始的で、あらゆる自然物は心意のある生き物であるとなす animism を信じ、生活の最終目的を探求しようとはしない。Wordsworth とは異り、彼は自然の中に神の姿を見ず、また、自然からは不滅の暗示も聞かないのである。壮大神秘的な unity で結ばれる万物という自然を彼はこよなく愛し、それを前にしては自らを敬ケン(虔)な一介の原始人と見なすのである。

彼の宗教を生み出した直接的な環境としては、Salinas の冷酷な物質主義、Monterey 半

島の放縦な気質などが考えられる。したがって彼の作品には特殊な宗教的色彩が目立つ。こうした彼は、人間生活、人間性、人間の運命、道徳的信条、宗教と人間の境遇との関係、宗教が人間の境遇を処理し指導する道徳律などに関する basic で pristine なキリスト教的な考えには全く関心がなく、したがってその方策などにも通じてはいなかった。Steinbeck に独自の宗教的意識は、人間存在の無為とそのあきらめを背景とする外部の世界や、社会機構からの一種の無意識的現実逃避ではなく、解放と自由を乗り越えて、人間存在の核心、更には生命本然の安住地を求めようとするものであつたのである。

(2) “is”-thinking

Steinbeck が *Sea of Cortez* で強調している “is”-thinking は生物学の研究によつて得られたもので、non-teleological という術語を意味深長にしようとして彼が考え出した名称であり、青春時代を過ぎた一人の考え深いカリフォルニア人である彼の人生についての一つの考え方である。これは why という問いにではなく、what とか、how とかという難問に答えようとするもので、what could be とか、what should be, what might be とかという問題とは関係なく（ここに Steinbeck の難点のあることを Blake Nevius はその著 *Steinbeck: One Aspect* で指摘している）、現実的に “is” であるものと人生を関係させ、気むつかしい道徳性についての誤つた判断やその取捨を避け、人生をありのままに受入れることによつてのみ人生愛の達成をはかろうとするものである。この態度は *Sea of Cortez* によれば、明確な原因の結果としてより、その outgrowths and expressions として事件を考察するのである。これは革命や人類につきものの幻滅の悲哀なども関係なく説明されるもので、彼の場合は、言葉の簡素化や物理的に触知しうる実在物への探求と同じほど重要なものである。精神的に退屈し、抽象化やイデオロギーに飽きはて、目で見、耳で聞き、鼻でかぎ、舌で味わえるものに慰めを見出そうとしたのは彼も Hemingway も同じであつた。大戦が起きた。大戦は人間のもつ非合理的の自己破壊的な推進力の証拠を地中に埋めさせてしまった。また *The Grapes of Wrath* の中に見られた Steinbeck の楽天性や信念を吹き飛ばしてしまった。彼は大戦のために “is”-thinking の強烈な虚無感へ追い返されたと信じたのであつた。

“is”-thinking を重視する彼はもちろん因果的思考、すなわち、目的論的思考には反対である。というのは、このような思考には、時間的生起によつて因果を説明しようとする誤り（post hoc, ergo proter hoc fallacy）がしばしば含まれているからである。この思考への反対は Comte の実証的思考体系に基礎をおいたもので、この見解の推進に当つては Comte の影響を強く受けている。

非目的論的な命題は progress という目的論的概念とは対立する。すなわち、自然界に見られる予定された計画や目的——これを用いると、すべての現象は説明されると考えられる——という観念とは対立するのである。しかし同時に非目的論的な見解をもつてすれば、すべてのことはただ一つの型の一部にすぎなくなるので、non-blaming なものとなる。the truest reason for anything's being so is that it is と考える Steinbeck の非目的論的思考は *Of Mice and Men* の基調をなし、*Sea of Cortez* の中心をなす哲学的概念であるが、一つの「現実の型」への態度でもある。またこれは楽観論者、道徳家、改革家などへの解毒剤でもある。というのは、彼らは極めて表面的な理解にさえ到達しないうちに、ある状態を改善しようと試みるからである。またこの思考は人間性への私心のない同情的接近にも役に立つものである。非目的論的方法はそれが道徳的判断を除去したり、Steinbeck が understanding-

acceptance と呼んだものにとつて代る限りにおいては、彼にとつては価値があると考えられる。W. O. Ross によれば、Steinbeck の作品の用いているものは、同時代の神秘主義者たちの用いた方法、すなわち、人間と宇宙との関係を取扱う直感的な非目的論的方法でもある。

完全体というものを知り人間もその一部であることを認めるのは、人を救う慈悲心であり、人間を生物学的存在から引き上げることであり、と Steinbeck は考えるのである。取るに足らないと思われるような作中人物にさえ彼は非目的論的な美徳を認めている。たとえば、暴徒から Lennie を救出する George に、自分を愛してくれる白痴の少年に誓を立てさせる Doc に、泥の中からパスを引き出そうと後戻りする Juan Chicoy に、退屈そうに自分の魅力を持ち続ける Camille Oaks に。これは彼が the love and understanding of instant acceptance をもつて “is” なるものを知る能力を持つていたことを立証するのである。しかし彼の作を通じて見れば、こういう非目的論的な、あるいは non-causal な思考に含まれる逆説のすべてが実際的には解決されていないことを、S. E. Hyman や W. O. Ross や F. Bracher などと共に認めざるを得ない。

(3) group-man theory

Steinbeck の group-man theory とは、人間には集団的精神記憶が無意識のうちに働くものである、とする説で、彼は人間の集合性の重要性を熱心に信じている。この概念は彼の作品に侵透しており、*Cup of Gold*, 1929 や *To a God Unknown* にも見られ、*The Grapes of Wrath* では重要な意義をもっている。この観念は彼の人生哲学の中心をなすもので、形を備えた人間はそれ自体実際には何物でもなく、かえつて抽象的な humanity がすべてであるとしている。集団とは他の別個の存在物であると考えられる、と彼は論じているが、この考え方は直感的ではあつても合理的ではない。社会学と実証主義の父と呼ばれる Auguste Comte と Steinbeck とは思想上非常な類似点をもっているが、個人は相対的には次第に重要性を無くしていくもので、個人は精神の一つの抽象であり、あらゆる人間で構成されている集団だけが真に存在するものである、となす Comte とは対照的である。集団は別個の存在物であるとなす Steinbeck の決論は生物学的には何らの支持も得られない。集団の人間の性質、目的、欲望は動物的集団の場合とは異なる。たとえば、戦争で個人が失われると集団の人間は愉快をさえ感ずるものである。Steinbeck はただ客観世界に愛情を感じ、かつ、その世界の有する神秘的意義を意識し、かつ、その世界の究極的単一性を信じ、自分がその世界と同一であると確信している。大体彼の作品は個人そのものよりは、本来的には、神秘的、社会的、心理的、生物学的な単位としての人間に關したものであるが、奇妙なことに彼の思想は概して集団の価値を否認し、個人の優位を主張する。これは一つの逆説である。この主張は、ある種族に survival quotient を保たせる新しい方向を示し、新しい出発を教えるのは個人だけである、という事実がその根底になつてゐる。彼のいわゆる group-man theory はこのように終始一貫しないもので読者を面くらわせる。“is”- thinking といい、group-man theory という Steinbeck の哲学的概念が「自家製で hausfrau sentimentality と naive mysticism によつて価値を損じられ混乱させられている」¹¹ことは、彼の作品 (*In Dubious Battle* は除外) によつて明らかにされる。

(4) view of man

Steinbeck は人間を説明する理論を発見しない前から人間に關心を持つていた。彼は理窟

なしに、否、積極的に人間が好きであつた。人間に対する彼の同情心は非常に強く、最も下級な人間の内にさえ罪をあがなう特性を見出せるほどの寛大さを持つていた。人を愛し人生を愛好した彼が政治的には無色であつたことは当然であろう。当初彼は人間を Reformer or Revolutionary として取扱つていたが、やがて Man as Animal (F. Champney) というように見方を変えた。つまり、人間を人間として見ることをやめ、人間を生物学的存在と見るようになったのであり、transformation into a crawling beast (*The Leader of the People* 中の老開拓者の言葉) の実感を *In Dubious Battle* や *The Grapes of Wrath* の中で見事に示しているが、これは Steinbeck の人間観の一大変ボウ(貌) を明示するものである。単純素朴な人間像を描いた Charles Vildrac や unanimisme (集団としての人類の一如的精神は各人の個人的特質よりははるかに重要なものとなす信念) の提唱者 Jules Romains などに見られる一如的集団主義は Steinbeck ほどには成功していない (Magny)。かくて Steinbeck は人間に対する希望を捨て、人間進歩を信じなくなり、希望の原因、進歩の結果などについても考えることを止めてしまつたのである。しかし、Steinbeck には人間存在の生物学的関係を越えたあるものへの未熟な暗示のあつたことは J. S. Kennedy と共に認めなくてはならない。この暗示を綿密に厳しく吟味すれば、キ(詭)弁も弄せず¹²に済み、理性によらず感情によつて人間性を考察する時必ず伴う感傷性も避けられたであろうに、彼の吟味のしかたには不十分なものがあつたと認めざるを得ない。このようにして人間肯定の最後の線上に立つた彼の胸中にも、ある種の不信の念が生れたことは知つておかねばならない。この不信感、他にも理由はあつたであろうが、主として地理的なもの、つまりカリフォルニアという背景から出ているようである。カリフォルニアの性格はアメリカの性格とは異り、dragged over the mountains and the desert with the other immigrant baggage and overdeveloped by the golden sun and the ache of homesickness¹³ という特殊なものであつた。この特殊性が不信感を生み出すに至る事情は彼の諸作品から読み取れる。

このような人間感を持つ Steinbeck が描く作中人物とはいかなるものであろうか。彼自身には道徳的な晴朗さや同情的な理解はあるが、作品にはそれがはつきりとは現わされず、あいまいである。したがつて作中人物には明確な意識と明瞭な個人性はなく、Alfred Kazin の言うように always on the verge of becoming human, but never do であり、かりにも全般的な人間として考えられるようなものは少い。Steinbeck は人間性を十分に実現させることについては、いつも失敗している。彼の関心は彼を生命の本性についてのある中心的真理へとともに引き入れて行つたが、それを作中の人物の中に確立する能力は彼にはなかつたようである。彼は能弁をもつて作中人物を愛してはいるが、彼の作中人物は一括して考えれば、しばしば邪悪なところがある。集積的な集団という原則に立つて動く社会は、そのメンバーを墮落させることによつて自らを毒するものである。彼が好んで描く特定社会の人びとはこのように墮落させられたメンバーであつて、ほとんどすべてが非知識人である。このような人びとと彼が懇意であつたことと、彼らを動かすものが何であるかを知る直感力¹⁴とは、おそらくは作家としての彼の最大の力であろう、と Champney は言う。彼はこのような力を持ちながらも *Tortilla Flat* の paisanos, *Of Mice and Men* の Okies (アメリカ中部の移動農業労働者), *In Dubious Battle* の農民などを叙する場合、またこれとは異つた範チウ(畴)に入るのであるが、*The Moon Is Down* の民主々義の戦いとナチ政権の象徴的な首領たちを書く場合にも、何か grave で、しかも、しかつめらしいものがあるよように感じ

られる。これは、そういう人物が Faulkner の作中人物とは異り、¹⁵ the corruptions of the earth ではなく、the unfulfilled promise of it を現わしていると思えば、われわれを首肯させるものがあるであろう。これはまた彼が単純さに対して生来興味を有していたことと個人の集合としてのある型にはほとんど関心の無かつたことを示しているのである。彼が貧しい人びとや浮浪者を取扱う場合、それは決してレンピン（憐憫）や社会改革の対象物として表現しているのではない。この点 E. Caldwell とは異なる。

一方彼がのびのびと、また、うれしそうに叙述のペンを進めている一群の人物がいる。それは彼が自然的であると考えよう人物、特に何らかの形で兄弟愛を見せるような人物であり、そういう人物に対しては常に賞賛を惜しまない。また海の生物の商業的研究所を営みたいた親友の Ricketts を原型とする作中人物を描く場合などもそうである。たとえば *In Dubious Battle* の Doc Burton, *Of Mice and Men* の Doctor, *The Snake* の Dr. Phillips, *The Grapes of Wrath* の Doc, *The Moon Is Down* の Doc, *Cannery Row* の Doc など。¹⁶ これらの人物は Steinbeck 自身の仮面であり、彼自身でもあるのである。一方彼はあらゆる型の家業家、特に何らの生産もやらず商品を動かすだけで、もうけようとする仲買人などに対しては、露骨なケンオ（嫌悪）を示している。前述のような両様の態度で描写する作中人物は、いずれも Steinbeck 自身の知っていたものであると言われる。換言すれば、彼の作には創造された人物はいない、ということになる。

(5) reason と emotion

Steinbeck の自然主義的観念はその小説の性格を決定する一つの大きな要因であるが、彼を自然主義者ときめつけるのは、ある意味では間違っている。F. Bracher の言うように、彼は冷ややかな自然主義者ではない。他の人には矛盾すると思われるような見解を彼は自らの見解と結合させ、そこから重要な考えを生み出すことをやっているのである。彼の書き方は厳密な科学的自然主義的伝統には入らない。したがって客観的ではない。彼は自然的行状を、また自然的であると考えられるものを愛し、自然法則と調和する人間の行為や態度を強調し、世間的な標準では、不道德であるような自然的な行為のうちにさえ神聖さを見、自然的なものの情緒的な価値に敏感である。彼が *Sea of Cortez* で目的論的思考に反対している一つの理由は、目的という点からする思考は現在あるいかなるものに対しても自然発生的な愛情、人間が周囲の世界に対して当然持つべき最も重要な反応である愛情を純粋なものにならせるからである。Steinbeck は創造物の単一性に関する神秘的な観念を展開しているが、この観念は複雑なものであつて、科学的自然主義が支持するものを可成り越えており、科学的合理的に証明する能力は彼には全くなく、感情、洞察、本能などによつて支持される不完全なもので、自然的なものに対する愛情に関連していることは、作品を通じてうかがえる。自然への深い理解は一片の土地の有するフン（霧）囲気をさえ鋭く感じとらせ、土地の神秘的な精神を是認させる。これが彼の作品の顕著な特性である。

帰納的科学的方法の信者としての Steinbeck が写實的にならなくてはならないことは当然であるが as a man of powerful affections and intuitions he must reflect irrational attitudes justifiable only in terms of the desire of the human spirit.¹⁷ 彼は Comte と同様、合理的精神は人間行為に比較的わずかしき影響を及ぼさないものであると見なしてはいるが、理性が語りうる多くのものを受け入れ、理性によつて作られる世界に本能と愛情が望むものを附加させ、その時々の世界に対する自分の立場を決定している。彼が残忍でもあり、やさし

くもあり、合理的でもあると同時に非合理的でもあり、また、具体的でもあり抽象的でもあるのは、こうした理由によるのである。彼の作品は奇妙な妥協を重要な要素としている。この妥協は人間の対宇宙関係を取扱う本能的、非合理的、かつ、神秘意識的な（これは合理的理解では全然解決のつかない意義意識である）方法、すなわち、現代の神秘主義者の用いる方法に似ている。ところが彼の方法は、人間が関係しなくてはならない世界は、現代的で科学的に解釈されている宇宙であるとするのであつて、この点で異つている。奇妙な妥協を正しく理解するには、理性と愛情についての彼の態度を明らかにしておく必要がある。Comte は理性と愛情を、召使いと主人の関係におき、愛情こそ理性の働く分野、理性が解決すべき諸問題を選定するものである、となしているが、Steinbeck は理性を更に後方に押しやつており、理性によつて完成さるべきものは信頼しようとしな。科学的方法の価値を固執している時でさえ、彼は科学の究極的な価値を疑問視するほどである。Comte は理性の欠陥を強調したが、Steinbeck は更にそれを徹底させたため、根本的には非合理主義者となつている。この点では D. H. Lawrence や A. Huxley を最も勝れたスポークスマンとする作家群に属する。Steinbeck は個人的人間を抑制する理性の力を否定してはいるが、一階級としてのプロレタリアに対しては、それが社会的美德の貯蔵所であることを崇物狂的に信じていたのである。彼は経験的思想の厳しいおきてを主張しながらも愛情が何らかの方法で命ずるままに思考している。強力な愛情と直感力を持つ人間が、合理的にのみ理解できる宇宙に対して、いかにして自らを正しく適応させるべきであるか？ というのが、彼の取組んだ問題であり、小説を書く基本的な問題でもあつた。理性と愛情、ないし、直感に互に強い主張をなすものであるが、また、時々矛盾する。いかにしてこの両者の在り方を決めたらよいか？ 彼は絶えずこの質問に悩まされていた。彼は理性に優位を与えようと試みたこともあつたが、後には愛情に基づく直感を主位におくようになったのである。

さて、一般的な評価では、Steinbeck は感傷家であるということであるが、これは正しい見方である。なるほど Clifton Fadiman は、Steinbeck の作品中によく見られる涙もろい調子（たとえば *Of Mice and Men* の中の涙を誘うような部分とか、*The Grapes of Wrath* の感傷的な結末など）を、つまりはお涙頂戴式な調子をけなしており、*The sentimentality which deluges these books [= of Steinbeck]* like cheap perfume is not a satisfactory substitute for a thorough emotional cleaning up. という A. H. Quinn の非難や、「マルクス主義者にとっては Steinbeck は単なる感傷的反動家にすぎなかつた。」¹⁹ という言葉もあるが、Steinbeck の感傷性は実は涙を超越しているのである。これは人間性に対する一つの見方であり、感情の一つの在り方である。同時代の作家たちと同じように彼もまた理性から逃避したが、そのために、在るがままの現実を完全に、あるいは調和的に、あるいは意義の面において見るができないので、彼を真のリアリストと呼ぶことは当らない。由来、鋭い知覚力と生き生きした巾の広い同情心は、芸術家の一大素質であるが、それがために作家はしばしば感傷的になり、melodramatic になるものであるが、Steinbeck の場合も同じである。彼の感傷性を責める人は、二者のうち一方という物の見方を考えてみる必要がある。こういう見方はわれわれの文化とか言語のうちにも深く入りこんでいる。しかし、人生に対する見方にしても、客観的な態度と愛情とを結び付けた見方があつても何ら不面目なことはないはずである。

次に Steinbeck の道徳的な立場について一言しておかねばならない。彼の立場は、彼が

East of Eden 執筆中の日誌に書かれた次の言葉からうかがえる。If the written word has contributed anything at all to our developing species and our half developed culture, it is this—great writing has been a staff to lean on, a mother to consult, a wisdom to pick up stumbling folly, a strength in weakness and a courage to support weak cowardice.²⁰ 彼はこのように文学作品の貢献を精神的なものにおいているが、彼の道徳的価値は何事かを成しとげることを指すのであつて、理論ではない。たとえば、現代文明の最も悪い例であると考えられる季節移住労働者の窮状の演劇化をやることである。とにかく、彼が同情と想像をアメリカ生活の忘れられた分野に及ぼすことができたのは忘れ難い。また、彼の性に関する道徳は動物主義とか、原始主義とでも称すべきものではあるが、作品に現われたところによると、幻想的な自然的神秘主義、あるいは、幻想的な人道主義によつて支持されており、この人道主義には彼の言う集団的人間という概念が内包されている。しかし、彼の認める道徳には moral impasse がある。換言すると、彼の道徳律は現代的ではないということである。B. Nevius の説くところによれば、現代的観念は寛容の根柢を拡大するに役立つので、good²¹ という語は Steinbeck の作に現われるような最も原始的な水準にある主題にのみ適用される、からである。なお善悪の問題については、*East of Eden*, その他の作で触れたいと思う。

(6) realism と primitivism

アメリカで1920年代に隆盛を見た realism の世界も1930年代に入ると Steinbeck (1902年生れ) の小説で色あせ始める。R. E. Spiller はこの理由を二つ上げている。(1)小説の場面がカリフォルニアの海岸へ移つたこと。この地区では文学作品、幻想的な果樹園、ぶどう園、宗派などにおいては、現実的には有り得ないようなことや不可能なことが実際に行われているように思われる。(2) Steinbeck の血がドイツ人(父)とアイルランド人(母)との混合であつたこと。²²(1)の理由からは、非実在的、神秘的な要素が、(2)の理由からは、感情的で詩的な要素が彼の realism の特質となる。当時の一般的スウ(趨)勢としては、自然主義的精神の否定が超絶主義や抽象主義への関心を高めていた。1930年代は彼の最も知られた小説の書かれた時代であるが、彼は1929年の大不況に鍛えられた読者大衆の知的、ないしは、情緒的必要物にこたえる顕著な、「ほとんど薄気味悪いような」(F. J. Hoffman) 能力をもつていた。彼は大都市において経済的不況を感じたのでもなく、また、そういう生活をしたのでもなく、カリフォルニアの温和な気候のもと、平和に満ちた果樹園でそれを感じたり、その影響を受けた生活をしたりした。こうした彼であつたからこそ、このような能力を持ち得たのであろう。不況時代の realism の間にあつて、彼に名声を与えたのは彼の tonic sanity (A. Kazin) であり、人間生活の広ハシ(汎)な過程に対する理解であつた。他の社会的 realist は自分の描く暗黒面だけが人生全体であると思ひ違ひするのに、Steinbeck にはカリフォルニア地方における訓練の賜物と、人間に対するカリフォルニア地方の明らかな信頼感があつた。したがつて彼の小説には不況時代の多くの小説に見られるような恐怖の念はなく、当代の小説に新鮮な調子、しかも社会に対する意識的責任のある調子をもたらしただのである。また彼の realism はさらに安定した時期の realism の持つ人間性、陽気さ、完全さ、とほほ匹敵できるものを持つている。批評家たちは、Steinbeck が彼らの言うような realist ではない、というので彼を非難する傾向があるが、この非難は当たらない。というのは、彼にはある reality があるのはもちろん、象徴と神話を通じての特異な作風があり、物語という

一つの立場からだけ彼の作品を読むことは大事な点を見失うことになるからである。

Steinbeck の芸術が究極的に落ち着いたのは原始的水準で、彼はこの水準では最も豊かなアメリカ文学の伝統の中にある。単純な精神の持主であり、異常にまで無心な簡素さを所有し、カリフォルニアの世界に対しては優雅な気持、やさしさ、気安さをもっていた彼の世界は、最後まで 舞台的巧妙さと手ぎわよさをもつ、本質的には内気で技巧にとんだ非創造的な primitivism の世界であり、S. Anderson を忍ばせるものがある。彼は人間行為の基底をなす動物的刺激に関心をもち、その刺激を用いて非実在的な世界を創造した。彼の知っている醜悪な世界はこの非実在的世界で埋合わされている。*The Wayward Bus* がその好例である。この作では、動物間の性は無邪気な必然的欲望で、統御や規正の必要はほとんどないという印象を受けるが、この印象の中に彼の倫理体系——これは生殖と生存の要求する自然法則への服従にのみ究極的美徳を見出すものであるが、実際には愛他主義の要素が加わって複雑なものになつている——を解くかぎがあるように思われる。彼は自分の憤激が単純なものであつたがために十分に原始的であり得たのであり、原始的なものへのアメリカ人の郷愁を自ら感じ、アメリカ文化のほこりやかな都会化に対する反作用として現代の機械文明に毒されていない原始的で単純な人びとへの愛情を S. Anderson や D.H. Lawrence のように作中に盛ることができたのであり、また、原始生活をしている単純な人びとの個人性の中に自らを投影することができたのである。また人間を人間にまで引戻し、不況のアメリカに、文化はそれを作り上げている人間的特質の総計にすぎないことを、また、life can give a periodical beauty to death any time (ある詩人の言葉)であることを思い出させることができたのである。彼が大規模な象徴を用い Eliot 風に、というよりは O'Neill 流に、現実、非現実の両世界の対立的交錯を巧みに保持できた時、彼の作は最上のものとなつた。しかし、彼は primitivism や簡素化から抜け出して人間の性格の眞実性を確立するまでには至らなかつた。彼の文学的如才なさと巧妙さが用いられた原因はここにあるのである。(未完)

注

- 1 Edmund Wilson : *Classics and Commercials*, p. 36
- 2 Alfred Kazin : *On Native Grounds*
- 3 Peter Lisca : *Steinbeck's Fable of the Pearl* (E.W. Tedlock and C.V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p.301)
- 4 Edmund Wilson : *Classics and Commercials*, p.38
- 5 John Steinbeck : *The Long Valley* 中にある。
- 6 Claude-Edmonde Magny : *L'Age du Roman Américain* 中に含まれており Françoise Gourier によつて1948年英訳されている。なお Magny 女史は第二次大戦後活躍したフランスの評論家。
- 7 Woodburn O. Ross : *John Steinbeck : Naturalism's Priest* (E.W. Tedlock and C.V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p.214)
- 8 Antonia Seixas : *John Steinbeck and the Non-teleological Bus* (E.W. Tedlock and C.V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p.277)
- 9 Blake Nevius : *Steinbeck : One Aspect* (E.W. Tedlock and C.V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p.200)
- 10 Steinbeck は二つの極、すなわち、海水のたまりと星との間を振動する。大抵の小説家が自分の領域であると考えている動物と聖者との間の区域については、彼は比較的わずしか触れていない (F.

- Bracher)。
- 11 Frederic J. Hoffman : *The Modern Novel in America : 1900—1950* 中 Steinbeck に対する決論の要旨。
 - 12 John Steinbeck : *The Long Valley* 中にある。
 - 13 Freeman Champney : *John Steinbeck, Californian* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p.143)
 - 14 *ibid.*, p. 150
 - 15 Edwin Berry Burgum の言葉 (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, XXV)
 - 16 なお Steinbeck の *Sweet Thursday* にも Doc が出てくるが違つた性格を持つている。これは Doc の破壊であつて Ricketts の死に 帰因する。Steinbeck の芸術は *The Wayward Bus* から新しい方向を取り始め、*Burning Bright* と *Sweet Thursday* で確定的となる。
 - 17 E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*. XXX
 - 18 Arthur Hobson Quinn : *The Literature of the American People*, p.961
 - 19 Rod W. Horton and Herbert W. Edwards : *Backgrounds of American Literary Thought*, p.244
 - 20 Peter Lisca : *John Steinbeck : A Literary Biography* (E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, p.21)
 - 21 E. W. Tedlock and C. V. Wicker : *Steinbeck and His Critics*, XXXI
 - 22 Robert E. Spiller : *The Cycle of American Literature*, p.289

Summary**The Study of Steinbeck**

Masakatsu MORI

(Department of English Literature, Faculty of Liberal Arts and Science)

The study of the man and works of John Steinbeck is very hard by the fact that there is complexity and even vagueness in his thought which is founded on his biological belief containing contradiction and inconsistency. Such philosophical ideas as group-man theory and "is"-thinking which are produced by Steinbeck who lays stress on animality of man, are unpolished, often spoiled and confused by sentimentality and mysticism. American realism begins to recede in his work. Humanity and sanity seem to characterize his realism. He proves to be in the richest American literary tradition by the primitivism.